

青少年交換の功罪

ロータリーでは青少年を外国に派遣する幾つかのプログラムを実施していますが、その代表的なものに、大学生や大学院生を対象にしたロータリー財団奨学生制度と、高校生を対象とした国際青少年交換プログラムがあります。

国際青少年交換が他のロータリーのプログラムと抜本的に違う点は、他のプログラムのすべてがその対象からロータリアンやその子弟を除外しているのに、国際青少年交換はロータリアン子弟をその対象に含めていることです。と言うよりも元来このプログラムは、ロータリアンがその子弟を外国のロータリアンに預け、その代わりに自分も外国のロータリアンの子弟を預かるという相互交換制度から出発したものです。二組のロータリアンの親が夫々の子供を交換して1年間面倒をみるのですが、何しろ精神的にも肉体的にもまだ未熟な子供たちが、言語も文化も環境も異なった異国で生活するのですから、その間には数多くの問題が起こります。気心の知れたロータリアン同志ならば、きっと実の子供と同じように、親身になって面倒をみてくれるに違いないという考え方で、種々の問題点を解決してきた経緯があります。

しかし、その後、国際青少年交換プログラムがロータリアン以外の人たちにも開放されるにつれて、交換学生もホスト・ファミリーもその資質が様変わりしてきました。品行の悪さに注意したホスト・ファミリーに、ファイティング・ポーズをとって反抗した学生、ホスト・ファミリーの娘さんを妊娠させた学生、異文化になじもうとせず一人部屋にこもってパソコンに興じる学生等々、交換学生を巡る好ましくない話題は尽きることはありません。一方、受け入れる側も、ホームステイを引き受ける家庭が限られているために、ホスト・ファミリーを転々と変わらざるを得なかったり、それを生業としている家庭に依頼したり、ホテル住まいを余儀なくさせたりして、親としての立場から子供の面倒をみるという青少年交換の本来の趣旨からほど遠いものになりつつあります。

最近、ホスト・ファミリーがセクハラを行ったとして、多額の損害賠償を請求されるという不祥事がありました。これはアメリカの話であり、日本ではそんなことは起こらないと断言できるでしょうか。ホスト・ファミリーがロータリアンの家庭ならば、ロータリアンの資質の問題としてそんなことが絶対に起こらないように指導することも可能でしょうが、交換学生を引き受けてくれた一般家庭の人の資質まで、ロータリアンが責任を負うことは不可能かも知れません。

いたずらに、交換学生の数にこだわるのではなく、青少年交換プログラムの原点に戻って、その目的を再認識し、受け入れ環境を再構築する必要があるのではないのでしょうか。そのためには ①ロータリアンの子女を優先する ②子女を送り出した家庭が、受け入れのホスト・ファミリーとなる ③有料の施設、ホテル等は利用しない ④地区やクラブに対する交換学生の強制的分配を避けることなどに留意する必要があります。

このプログラムを利用して海外の学校に留学した生徒は、国際感覚を身につけるという日本に居ては絶対に味わえない貴重な経験をします。その一方で日本の常識が、決して世界の常識ではないことを学びます。日本ではどんなに成績のよい生徒でも、総じて教室では寡黙で、当てられて初めて発言をしますが、外国では、発言をしないことは知らないことを意味します。知っていることは当てられなくても、自発的に発表します。交換学生もその術を習得して自己主張の楽しさを身に着けます。しかし自己主張という国際的な長所は、往々にして、日本の社会では鼻持ちならないと受け止められ兼ねません。一度海外生活を経験した子供たちは、いろいろな機会を利用して、再渡航したり、中には

海外に定住する者も多いようです。これは海外の生活が快適だからではなく、日本の社会が帰国子女を受け入れようとせず、異質な存在として差別することも大きな原因となっています。ロータリーが、海外の生活の機会を与えたことが原因で、一方で、日本の社会では受け入れられない子供たちを作っていることにもなり兼ねないのです。

2006年7月10日